

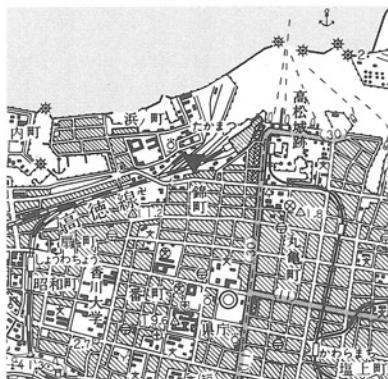
## 香川・浜ノ町遺跡

て整備され、一八世紀前半までは武家屋敷として利用されていた。木簡は、中世の井戸一基から一一点、近世の土坑一基から一点出土した。

- 1 所在地 香川県高松市浜ノ町・錦町二丁目
- 2 調査期間 二〇〇〇年（平12）一月～二〇〇二年三月
- 3 発掘機関 財香川県埋蔵文化財調査センター
- 4 調査担当者 古野徳久・乗松真也
- 5 遺跡の種類 集落跡・武家屋敷跡
- 6 遺跡の年代 一三世紀後半～一五世紀末、一六世紀末～一八世紀前半

### 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

浜ノ町遺跡は現高松市の海浜部に位置し、中世後半段階では砂堆上に形成された区画溝を伴う集落である。多量の土鍤と搬入遺物（土器・陶磁器・砥石・結物など）の出土から、網漁業と物資流通を経営基盤としていた集落と想定できる。一六世紀末に高松城が築かれた後、当遺跡部分は城下町の一画とし



（高松）

SE四〇三は、一五世紀中葉に廃絶された井戸である。井側は上部が多角形の木枠、下部が結物の二段確認された。上部にはさらに一段存在した可能性が高い。井戸廃絶時の井側抜き取りに際して土坑が掘削され（SK四〇八）、この土坑中から(1)～(5)が、井戸枠内の埋め戻し土中から(6)～(10)が出土した。共伴遺物には、土師質土器杯・足釜、瓦質土器甕、青磁碗、木製柄杓・織機、砥石、碁石などがある。

SE五一〇は、一五世紀後半に廃絶された石組井戸である。井戸廃絶に伴う埋め戻し土中から(1)が出土した。共伴遺物には、土師質土器杯・足釜・鍋、備前擂鉢、飯蛸壺などがある。

SK三〇六は、一七世紀初頭に埋没した土坑である。埋土は暗灰色から黒色の粘土層で、長期間滞水状態にあったことが推測される。土坑底部付近から多量の木片に混じって(12)が出土した。共伴遺物には、景德鎮窯系青花皿、漳州窯系青花皿、漆器椀、飯蛸壺などがある。

出土状況及び記載内容から、出土した木簡は全て呪符木簡と考えられる。

浜ノ町遺跡の他、高松平野における呪符木簡の出土は、空港跡地

遺跡 SD-f八三（本誌第一四号）。一五世紀中葉～一六世紀後葉。香川県  
 教育委員会ほか「空港跡地遺跡IV」（空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発  
 挖調査報告四、110000年）、東山崎・水田遺跡C区SD一一（本誌  
 第一三号）。一六世紀～一七世紀初頭。香川県教育委員会ほか「東山崎・水  
 田遺跡」（高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一、一九九二  
 年）で認められ、呪符木簡の埋納（廃棄？）は、一五世紀中葉以降  
 に広がり一七世紀初頭以降にみられなくなる中世後半に特徴的な現  
 象として捉えられる。また、近世遺構出土の⑫を除いて、区画溝を  
 伴う屋敷地に関連する遺構からの出土である点も、高松平野での特  
 徴として挙げられる。

## 8 木簡の釈文・内容

## 土坑SK四〇八

- (1) 「<sup>(ターハ)</sup> 迷故<sup>(ハ)</sup>二界當」 177×30×6 011
- (2) 「<sup>(タラーカ)</sup> 悟故十方空」 152×33×5 011
- (3) 「<sup>(キリーカ)</sup> 本来无東西」 173×30×5 011
- (4) 「<sup>(アク)</sup> 何處有南北」 152×32×6 011
- (5) 「<sup>(バ)</sup> 一切日皆善一切宿皆賢  
以此<sup>□□□□□</sup>吉祥」 176×51×6 011

## 井戸の玉五一〇

- (11) 「<sup>(ターハ)</sup> 是<sup>(ハ)</sup>」
- 〔陳烈カ〕  
• <sup>□□□</sup><sub>□</sub> 在前 □七福<sup>□□□</sup>  
□□□<sup>□</sup> ☆惡魔遠離寿福近」 (247)×51×6 081

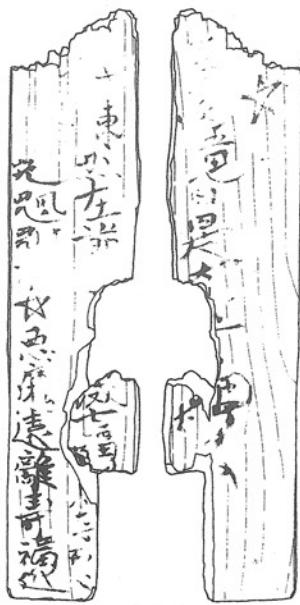
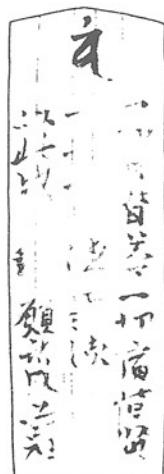
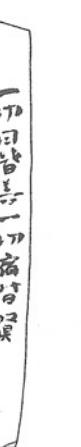
## 土坑SK三〇六

- (12) 「咄咲咤<sup>□□</sup>（符籙）鬼急々如律令」 205×62×7 011

## 井戸の玉五一〇

- (6) 「<sup>(ターハ)</sup> 迷故<sup>(ハ)</sup>二界當」 187×30×5 011
- (7) 「<sup>(タラーカ)</sup> 悟故十方空」 183×32×5 011
- (8) 「<sup>(キリーカ)</sup> □□□」 188×30×5 011

(1)～(10)は、(1)～(5)、(6)～(10)の一セットの呪符木簡と考えられる。  
 いずれも上端部を尖らせる。(11)は表裏両面に記載が認められる板状



の呪符木簡。上端部は欠損しているが、意図的な切断とは考えがない。欠損部、判読不能な文字が多く、記載内容全体は不明である。

(12)は上端部を尖らせた呪符木簡。墨は全く残っていないが、わずかに文字の痕跡が確認可能である。

なお、今回紹介する木簡は、いずれも高級アルコール法によつて保存処理済みである。

釈読にあたつては(財)香川県置県百年記念財団・香川県歴史博物館の渋谷啓一・御厨義道両氏のご教示を得た。

## 9 関係文献

香川県教育委員会ほか『浜ノ町遺跡』(サンボート高松総合整備事業

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告六、二〇〇三年)

(乗松真也)

## 徳島・新蔵町三丁目遺跡

しんくらちょう

1 所在地 徳島市新蔵町三丁目

2 調査期間 第一次調査 一九九五年(平7)七月～二二月

3 発掘機関 (財)徳島県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 近藤 理・横田温夫・湯浅文則

5 遺跡の種類 城下町跡

6 遺跡の年代 江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

新蔵町三丁目遺跡は徳島城下町遺跡の一つで、吉野川を中心とする河川によつて形成された沖積地上に立地する。徳島城下町は、天

正一三年(一五八五)の蜂

須賀家政の阿波入国以後に築かれた徳島城の周辺に配置された。街区は、徳島・

福島・寺島・常三島・住吉島・出来島の六つの島と、

新町・富田・助任前川・佐古の各地区からなる。新蔵町三丁目遺跡は「徳島」に



(徳島)